農業の新技術競演

九州アグロ・イノベーション 福岡市できょうまで開催 170社以上出展

「九州アグロ・イノベーション―九州みどりの食料システムEXPO2025」が17日、福岡市で開幕した。国が推進する「みどりの食料システム戦略」や、省力化につながるスマート農業などに関するブースが出展。最新の資材や機材をアピールした。18日まで。

日本能率協会が主催し、170社以上が出展する。スマート農業、暑さ対策、鳥獣被害対策・ジビエ利活用、草刈り・除草など、各分野での課題解決に役立つ資材や技術を紹介。来場者数は4000人を見込む。

コンソーシアムが展示したイチゴのパック詰めロボット（17日、福岡市で）

農研機構西日本農業研究センターなどでつくるイチゴパックロボコンソーシアムは、イチゴの出荷・調製作業を省力化するロボットを展示した。カメラと重量センサー、果実を傷つけずに移動できるアームを使って、重量別にイチゴを粗選別する。パッケージセンターでの作業の省力化などにつなげる。

同コンソーシアムは新たな包装手段「シュリンク包装」も解説した。果実にフィルムを密着させ、輸送中の果実同士の擦れなどを抑制。損傷を大きく減らす。資材価格は慣行のフィルムと同程度で、従来の出荷容器も利用可能だ。新たに機械導入が必要だが、フィルム張りの作業人数が減らせて、省力化や人件費の削減につながる。

中山間地でも使いやすい農業用ロボットを開発するテムザック（京都市）は、愛知県と共に開発を進める新型の除草ロボットを持ち込んだ。同県で広がる育苗と田植えを省略可能な不耕起V溝直播（ほ）栽培で、圃場（ほじょう）が固く除草が難しい課題を解決する。

処理能力は10アール当たり約2時間で、ハンマーナイフや除草カッターを使って条間の雑草を除草する。現在はリモコンで操作するが、将来的には自動走行の実現を目指す。

販路の拡大などに向け、九州管内のJA経済連からも出展があった。JA熊本経済連は果実を使った加工品や青果を展示。JA鹿児島県経済連は鹿児島黒牛やサツマイモ、かんきつなどを紹介した。

（小林千哲）

©日本農業新聞　無断複製転載を禁じます。